



発行所 長野県農業卸商業協同組合
長野市大字栗田2142番地
TEL. (026) 228-5730
FAX. (026) 228-5818
定価 1部50円(税込)

当面の技術

5月・6月の果樹病害虫対策

りんご・ぶどう・もも

果樹試験場 技師 島袋稚子(病害)
研究員 宮崎 光(虫害)

◇つばきの病害

○黒星病対策
昨年の試験場内における殺菌剤無散布樹での初発は4月30日であった。その後、5月6月は地域差はあるものの少雨傾向で推移したため、発生量は昨年より少なかった。

本病は雨媒伝染性の病害である。第一次伝染源は、前年の被害落葉上に形成される子の胞子である。一次伝染は開花前後がピークとなり、落花20日後頃まで続く。初発後は病斑上に形成された分生子により二次伝染が続く。

○腐らん病
近年、発生が高止まりしており、対策に苦慮している。本病の伝染源は病斑上で形成される子の胞子および柄胞

◇りんごの虫害

○ユキヤナギアブラムシ
5月中旬頃からユキヤナギアブラムシの発生がみられる。発生が増加する5月中旬(落花10~14日後)頃に効果のある薬剤を用いて防除する。

○モモンカイガ
5月下旬~6月上旬頃から成虫が発生する。防除は、幼果への産卵が多くなる6月中旬頃頃から実施する。春先からの気温が高く推移すると発生が早まる可能性がある。

○カスミカメムシ類
開花期から落花後はケムシ類(ヒメシロモンドクガやマイマイガなど)の防除時期にあたり、花粉媒介昆虫に影響の少ない薬剤を散布する。

○黒こぶ病
欧州系品種の生産拡大に伴い、本病の発生が問題となっている。

○クワコナカイガラムシ
5月上旬頃から、クワコナカイガラムシ越冬世代のふ化幼虫が発生する。薬剤は若齢

冬し、翌年の伝染源となる。4~5月ごろに、降雨によって病斑上に多数の分生子が形成され、これらが雨滴によって伝播する。病斑形成後、数日を経て胞子を形成し始め、二次伝染を繰り返す。

○せん孔細菌病
昨年は発生が目立たなかったが、もも、ネクタリンでは最重要病害であるため、今年度も引き続き防除対策を徹底する。

○ウメシロカイガラムシ
5月中旬~下旬にウメシロカイガラムシのふ化幼虫が発生する。ふ化幼虫の発生初期にアプロードフロアブルを散布する。

○モモハモグリガ
6月上旬は、モモハモグリガ第1世代の防除適期である。関係機関(病害虫防除部など)からの情報を参考に、成虫発生初期に食入防止効果の高い薬剤を散布する。

○カスミカメムシ類
近年、欧州系品種で、カスミカメムシ類の被害がみられる。4月下旬~5月上旬の発芽期頃から、幼虫が新梢先端の柔らかい葉や幼花穂を吸汁加害する。

○クワコナカイガラムシ
5月上旬頃から、クワコナカイガラムシ越冬世代のふ化幼虫が発生する。薬剤は若齢

長野県からのお知らせ

毒物劇物取扱者試験の実施について

令和八年度の長野県毒物劇物取扱者試験を次のとおり実施します。

一 試験日
令和八年七月二十九日(水)

二 試験会場
佐久市 佐久平 交流センター

三 試験区分
一般
農業用品目
特定品目

四 試験科目
毒物及び劇物に関する法規
基礎化学
毒物及び劇物の性質及び貯蔵その他取扱方法

五 受験資格
学歴、年齢及び経験は問いません。

六 受験願書の配布
試験案内と受験願書は、五月中旬頃から、長野県内の保健福祉事務所、中核市保健所及び健康福祉部事業管理課で配布する予定です。

七 受験手続き
今年度から申請方法が変更となっております。

八 その他
毒物劇物取扱者試験に関する情報は、長野県公式ホームページをご覧ください。

九 問い合わせ
お問い合わせ先
長野県内の保健福祉事務所、中核市保健所又は健康福祉部事業管理課
ながの電子申請サービス
ページ等によりお知らせいたします。

十 申し込み
申し込み方法
書面申請又はながの電子申請サービスによる電子申請のいずれかにより行います。

十一 提出書類等
提出書類等

殺ダニ剤/展着剤(殺虫剤・殺菌剤)として果樹類で使用できるようになりました!
果樹類のハダニ類対策に!
展着剤としても使えます!
野果類のハダニ類、アブラムシ類、コナジラミ類、うどんこ病対策としてもご利用いただけます。

農薬適正使用研修会を開催します。
農薬の使用機会が増える六月一日から八月三十一日にかけて、全国で農薬危害防止運動が展開されます。
本県では、農政部、健康福祉部、環境部が連携し、農薬の安全かつ適正な使用の推進を呼びかけています。

毒物劇物取扱者試験の実施について
令和八年度の長野県毒物劇物取扱者試験を次のとおり実施します。
一 試験日
令和八年七月二十九日(水)
二 試験会場
佐久市 佐久平 交流センター

毒物劇物取扱者試験の実施について
令和八年度の長野県毒物劇物取扱者試験を次のとおり実施します。
一 試験日
令和八年七月二十九日(水)
二 試験会場
佐久市 佐久平 交流センター

毒物劇物取扱者試験の実施について
令和八年度の長野県毒物劇物取扱者試験を次のとおり実施します。
一 試験日
令和八年七月二十九日(水)
二 試験会場
佐久市 佐久平 交流センター



なしにおける本種の主な加害時期は7月下旬から9月上旬で、この時期には散布間隔を10日以上空けない。

本種の被害は果実の成熟期が近づくと増える。近年は温暖化に伴い、8月中旬以降の発生量が多く、9月中旬頃まで飛来が続く場合が多い。南信農業試験場内では、幼虫による果実の加害が10月上旬まで確認されている。フェロモントラップの誘殺情報を確認し、防除の打ち切り後に被害が発生しないよう注意する。

○カイガラムシ類
近年、色々な果樹で様々な種が発生し、なし、かき、うめともに被害が問題となっている。カイガラムシ類の効果的な防除時期は、若齢幼虫期に限られる。若齢幼虫期は発生種により異なるので、種を見極める必要がある。また、発生が多い場所は、散布むらや、防除の死角となる場所に薬剤が到達していない場合が多い。特に柵の支柱周辺や、園地の境界付近など、防除の死角となる場所は注意が必要である。園内を良く観察し、カ

イガラムシが多発している場所では、薬剤がかかりやすくなるような樹形となるように管理するとともに、丁寧な薬剤散布を心掛ける。

ア. うめのウメシロカイガラムシ
第1世代の幼虫は化盛期は5月中旬であるので、有機りん剤を使用する場合の防除適期は5月中旬下旬である。発生が多い場合は、ブラシで擦り落とすなどの物理的対策も組み合わせる。この時期に効果のある薬剤を選択しているのに被害が減らない場合は、ふ化時期の異なる近縁種のクワシロカイガラムシが発生している可能性がある。肉眼での判別はできないので、指導機関に相談してほしい。

イ. なしのナシマルカイガラムシ
防除適期は第1世代幼虫がふ化盛期となる6月上旬中旬である。その後の世代と比べると幼虫の出現時期は比較的揃っているため、効率よく防除する点で重要な時期である。幼虫が歩行する時期に両面テープを枝に巻き付けると、黄色い幼虫を捕獲できるので、防除時期を判断する参考にしてほしい(平成19年度普及に移す農業技術第2回「粘着テープトラップによる果樹カイガラムシ類幼虫の発生時期調査」)。

ウ. なしのクワコナカイガラムシ
粗皮下に産下された卵のうちの卵で越冬する。越冬卵のふ化は5月上旬から始まり、完了期は5月下旬から6月上旬である。近年のように春先の気温が高いとふ化時期が早まるため、防除が遅れないように注意する。多発園では7

月中旬下旬にも防除する必要がある。

エ. かきのフジコナカイガラムシ
粗皮下で、主に1〜2齢幼虫で越冬する。越冬虫から産まれた第1世代の幼虫は化時期は6月中旬から7月上旬中旬であり、防除適期は6月下旬とその約4週間後の7月中旬下旬である。本種の場合は、樹体の生育の早晩とふ化時期の早晩が一致しない場合がある。このため、フェロモントラップにより、越冬世代雄成虫の発生消長を確認する必要がある。6月上旬頃、南信農業試験場のホームページに予測ふ化時期を掲載するので、参考にして欲しい。

8月の第2世代以降は発育ステージが混在するようになり、枝葉も大きく、なるため、殺虫剤の防除効果が低下する。殺虫剤の散布による防除は、越冬世代を対象とした休眠期から発芽期の防除と、第1世代を対象とした6月中旬下旬と7月中旬下旬の2回の防除を基本として、重点的に実施する。令和7年末にフジコナカイガラムシの交信かく乱剤「フジコナコン」が登録された。南信農業試験場で行った調査では高い効果が認められたため、農業情報として公表予定である。この交信かく乱剤は、雄成虫が雌成虫と交尾することを妨げる。フジコナカイガラムシはチョウ目害虫と違い、雌成虫の生息範囲が広がり、ついでに、交尾を妨げることで次世代の数を減らすことが期待できる。南信農業試験場が行った試験では約3・4aの小面積でも効果が認められたため、販売が開始されたときには、ぜひ設置を検討してほしい。

○ハダニ類
なしではナミハダニ、カンザワハダニ、リンゴハダニ、クワオオハダニなどが発生するが、近年はナミハダニによる被害が目立つ。発生初期と梅雨明け直後の防除が基本であるが、天候によっては初発時期が前後する。令和7年は、梅雨明け宣言(速報値)前か(気温が高くと、例年に比べると防除適期は早かったと考えられる。

なしでは主枝分岐部付近の徒長枝や、改植した若木などで発生が早い傾向がある。ナミハダニは高温乾燥を好むため、ほ場内でも日当たりが良く、気温が高く乾燥気味な場所での初発が早い傾向がある。舗装された道路沿い、石垣やコンクリートの付近など、同一ほ場内でも発生しやすい場所がある。そういった場所を把握しておき、定期的に観察していること早期に対応できる。ハダニ類は薬剤抵抗性が特に出現しやすい。殺ダニ剤の散布数日後に葉裏をルーペで観察し、防除効果を確認する。殺卵性が期待される薬剤の場合は1週間程度後に、ふ化幼虫の発生有無で効果を確認する。また、同一系統(同一IRACコード)の殺ダニ剤の使用は年1回とし、前年最後に散布した殺ダニ剤と、本年最初に散布する殺ダニ剤が同一系統とならないように注意する。



図5 ナシ輪紋病(「オーロラ」の果実)



図6 カキ円星落葉病(「市田柿」の葉、岩波靖彦原図)



図7 カキ炭疽病(「市田柿」の果実)



図8 ウメかいよう病(「竜峡小梅」の果実)

(注)紙面の都合上、本文中に掲載の農業の登録情報は省略した。使用にあたっては最新の登録情報を確認すること。

植 防 短 信

農薬の安全使用について

近年、住宅地と農地の混在化等により、住宅地等への農薬の飛散等によるトラブルが増加しています。このため、長野県では平成二十五年四月二十六日付けで改正された「住宅地等における農薬使用について」通知の内容について、研修会等で周知・徹底を行ってまいります。具体的には、農地のみならず、公園や公共

施設、街路樹の管理や家庭菜園等あらゆる場面で農薬が使用されている中で、周辺環境に配慮した農薬使用を推進する必要があります。同通知では、公共施設や住宅地付近で農薬を使用する場合は、次の六つの項目について特に注意することとされています。(以下、抜粋)

(一) 農薬使用者は、病害虫及びその被害発生の早期発見に努め、被害の有無に関わらず定期的に農薬を散布するのである。その後の世代と比べると幼虫の出現時期は比較的揃っているため、効率よく防除する点で重要な時期である。幼虫が歩行する時期に両面テープを枝に巻き付けると、黄色い幼虫を捕獲できるので、防除時期を判断する参考にしてほしい(平成19年度普及に移す農業技術第2回「粘着テープトラップによる果樹カイガラムシ類幼虫の発生時期調査」)。

(二) 農薬使用者は、病害虫に強い作物や品種の選定、適切な土づくりや施肥の実施、防虫網等の物理的防除等の活用により、農薬の使用量を抑えること。

(三) 農薬取締法に基づいて登録された、当該植物に適用のある農薬を、ラベルに記載されている使用方法及び使用上の注意事項を守り、使用すること。

(四) 農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意するとともに、飛散を抑制するノズルの使用や、粒剤等の飛散が少ない形状の農薬を使用する等、農薬の飛散防止に最大限配慮すること。

(五) 農薬を散布する場合は、事前に周辺住民に対して、農薬の使用目的、散布日時、使用農薬の種類について十分な周知に努めること。特に散布区域の近隣に学校や通学路がある場合は、児童・生徒、学校施設へ農薬が飛散することがないよう、該当する学校や保護者等への周知を図るとともに、通学時間帯の散布を控えるなど、最大限配慮すること。

(六) 農薬使用者は、農薬を使用した年月日、農薬の種類又は名称、並びに使用した農薬の単位面積あたりの使用量、希釈倍数等について記帳し、一定期間保存すること。

また、普段から周辺住民とのコミュニケーションを図り、農薬使用者と周辺住民が良好な関係を築いていくことも重要となります。

農薬の使用にあたっては、周辺への飛散防止や、周辺住民の健康、また水質への影響など、周辺環境全体へ配慮した散布を心掛けていただくようお願いいたします。

(農政部農業技術課)

しぶといハダニはサラバでござる!

ダニサラバ フロアブル
虫にも病気にも効く新タイプの殺虫剤!

ハチハチ フロアブル
カイガラムシ類・チョウ目害虫防除に!

オリオン 水和剤 40
パワフルフルーツ殺菌剤!

オーシャイン 水和剤 フロアブル
新規系統のうどんこ病防除剤

ショウチナスケ フロアブル

OAT アグリオ株式会社

葉面散布用カルシウム肥料

ストピットII
STOPIT THE SECOND
果実のカルシウム欠乏症の予防、品質向上に

炭酸カルシウム水和剤 農薬登録No.9385

クレフノン
CLEF-NON
リンゴ、カキ、ナシの果面保護に

資料請求先 **白石カルシウム株式会社**
食品アグリ資材G/〒104-0031 東京都中央区京橋1-11-1 TEL. 03-3538-2354

BASF We create chemistry

果樹、野菜の味方!
BASFの4製品が守ります

高濃度少量散布ができる! 果樹園の下草防除に **除草剤**
バスター ※高濃度少量散布に用いては登録ラベルを確認してください

黒星病や褐斑病防除に **殺菌剤**
新規の有効成分配合 **ベランティー** フロアブル Powered by Revisyl® Active

2つの有効成分で **殺菌剤**
野菜の幅広い病害をブロック! **シグナム WDG**

アブラムシ専用剤新登場! **殺虫剤**
ダンシング効果で葉菜類を守る! **セフィーナ DC** Powered by Inscalis® Active

BASFジャパン株式会社
東京都中央区日本橋室町3丁目4番4号 OVOビル3階
0120-014-660 https://crop-protection.basf.jp/

詳細やSDSはWEBでもご覧いただけます。

当面の技術

5月・6月の病害虫対策

野菜・花き

野菜花き試験場

研究員 中島宏和(病害) 研究員 養島萌子(虫害)

【病害】

○アブラナ科野菜の黒斑細菌病 アブラナ科野菜の黒斑細菌病は大型の黒褐色病斑を形成する細菌性の病害で、育苗期から収穫期まで、栽培中の全ての生育ステージで発生する。病原菌は発病した葉から降雨によって周囲の株に二次伝染し、やがてほ場全体に蔓延する。本病がほ場に蔓延してしまつた後では、有効な対策がないので、本病を発生させないよう予防的に対策を続けることが重要である。まず、発病した苗および株の早期発見と除去に努め、できるだけ黒斑細菌病にかかりにくい品種を選択する。これらの対策を実施したうえで、薬剤防除を実施する。結球アブラナ科野菜では定植から結球初期まで(はなやさい類では定植から出蕾まで)が本病の重要防除時期であるため、この間は効果の高い薬剤を定期的に散布する。それ以降は収穫に向けて薬害の発生リスクが低い薬剤による防除を実施する。これまでの試験研究から得られた黒斑細菌病の病徴、本病の発病サイクル、本病菌の簡易診断技術、発病の品種間差、防除薬剤などに関する情報を体系化した「アブラナ科野菜の黒斑細菌病防除指針(Ver.2)」は長野県農業関係試験場のホームページで確認することができる。(以下QRコード)



【虫害】

○ハクサイ・ピシウム腐敗病 本病は土壌伝染性の病害で、ほ場の土壌から腐敗菌が接触した基部から腐敗が發生し、多湿時には白色の菌糸を伴って感染部を水浸状に腐敗させる。病徴は同じ糸状菌の菌核病と類似しているが、ピシウム腐敗病では、ねずみの糞のような黒色菌核は形成されない。一方、細菌性の病害である軟腐病とは、独特の悪臭が發生しないこと、菌糸の発生が認められないことから区別することができる。ただし、ピシウム腐敗病は軟腐病の発病を助長するため、併発する事例も多くみられる。本病の生育適温は25〜30℃で、梅雨、秋雨期に発生しやすい。排水不良のほ場や、地際部が多湿な条件では発病が助長される。このため、株元が蒸れないよう排水性の改善に努める。また、発病株や残渣はできるだけ早期に抜き取るなどしてほ場外に持ち出し、適切に処分する。薬剤による防除は、発病前や長雨前後に予防的に行つた。

○セリリー萎縮炭疽病 本病は、セリリーの新品種に激しく生じるえぞ斑点と葉の奇形が特徴で、平成23年に長野県で初めて発生が確認された。近年セリリー疫病とともに課題となっている病害であり、夏秋作型で最も多く発生するが、育苗期にも発生することが確認されている。発病適温は24〜28℃で、高湿度条件下で発病が助長される。分生子胞子の飛散には水滴が必ず必要で、降雨等によって感染が拡大する。

本病の登録農薬は、現在ダコニール1000とダコニールアルファのみであるため、温湯による種子消毒、育苗施設やほ場の罹病残渣や雑草の除去、発病株の早期発見と除去といった薬剤散布以外の基本的な防除方法から実施していただきたい。

○ウツバ類 本県の葉菜類で主に問題となるタマネギウツバは、例年4月下旬から5月中旬にかけて成虫の発生が増加し、以後は10月末ごろまで続く。卵は葉裏に一つずつ産下される。大型のチョウ目害虫であるため1頭あたりの摂食量が多く、多発した場合は被害が大きくなる。結球野菜では固い外葉の裏などに生息することが多いため、浸透移行性の低い薬剤では効果が不十分な場合がある。定植時の薬剤や苗への灌注処理剤を利用し、

防除の導入が必要である。生物的防除の一つとして、施設栽培ピーマン(カラーピーマンを含む)、夏秋どりのいちごにおけるスワルスキーカブリガニ剤の効果を確認しているため、併せて検討いただきたい(平成27年度普及技術、令和4年度技術情報)。

【害虫】

○アザミウマ類 5月中〜下旬になると野外でのアザミウマ類の密度が急激に上昇し、それに伴い栽培ほ場や施設への飛び込みが増加する。特に、ほ場周辺にハナアザミウマ類が好むシロツメクサやタンポポなどが花を咲かせている場合は、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマが増えやすい。アザミウマが増えやすい。除草などの対策をとり、ほ場や施設内での発生を抑制する。アザミウマ類は短期間で密度が急激に増加するため、発生初期の防除が重要となる。作物の葉や花をよく観察する、または、有色の粘着板等を使用して、発生初期をとらえるよう努める。ネギアザミウマとミカンキイロアザミウマには黄色粘着板、ヒラズハナアザミウマには青色粘着板が適する。

前述した様に、アザミウマ類は生長スピードが早く増殖能力が高いため、ほ場内で増殖してしまつと防除が難しい。また、近年は殺虫剤に対する感受性の低下が各地で報告されている。薬剤抵抗性の発達を抑えるため、薬剤のローテーション使用を徹底する。また、薬剤のみでの防除が困難であるため、周辺の環境整備や侵入抑制、物理的、生物的防除を組み合わせた総合

効果的な防除を心がけたい。

○コナガ 初発は標高により、3月下旬〜5月下旬と幅がある。中信地域では5月中旬頃から成虫の発生が増加し始める。摂食量が多く甚大な被害をもたらすのは終齢期の4齢幼虫であるが、4齢幼虫は殺虫剤に対する感受性が低い。そのため若齢期のうちに薬剤散布を実施し、効果的に防除する。特に、5月中旬以降にアブラナ科作物を定植する場合は、定植直後から被害を受ける可能性があるため、定植時に苗への灌注処理剤を使用することが望ましい。また、世代更新が早く、薬剤への感受性が低下しやすいため、作用機構の異なる剤によるローテーション防除を徹底する。ほ場周辺のアブラナ科雑草にも生息するため、周囲の環境にも注意を払う。

害虫のはなし

アカスジカスミカメは、斑点米を発生させ、コメの品質低下を引き起こす斑点米カメムシ類の一種である。これまではアカヒゲホソドリカスミカメが東地域の主要種と考えられてきたが、2024年及び2025年の発生予察調査(水田内すくい取り)ではアカスジカスミカメの捕獲地点率は斑点米カメムシ類の中で最も高くなっており、本種はアカヒゲホソドリカスミカメと並んで斑点米カメムシ類の重要種となっている。

【県内における発生状況と分布拡大の背景】 長野県では、2002年に木曾郡旧山口村で初確認されて以降、2010年以降は県南部、2015年以降は中信及

効果的な防除を心がけたい。

○コナガ 初発は標高により、3月下旬〜5月下旬と幅がある。中信地域では5月中旬頃から成虫の発生が増加し始める。摂食量が多く甚大な被害をもたらすのは終齢期の4齢幼虫であるが、4齢幼虫は殺虫剤に対する感受性が低い。そのため若齢期のうちに薬剤散布を実施し、効果的に防除する。特に、5月中旬以降にアブラナ科作物を定植する場合は、定植直後から被害を受ける可能性があるため、定植時に苗への灌注処理剤を使用することが望ましい。また、世代更新が早く、薬剤への感受性が低下しやすいため、作用機構の異なる剤によるローテーション防除を徹底する。ほ場周辺のアブラナ科雑草にも生息するため、周囲の環境にも注意を払う。

【被害発生要因】

本種は通常、出穂前の水田には侵入せず、水田畦畔や耕作放棄地等のイネ科植物等を寄主として増殖することから、これらの場所が主要な発生源となる。

本種の水田への侵入は出穂2週間後〜登熟後半に増加する。出穂期〜出穂10日後頃の侵入が多いアカヒゲホソドリカスミカメと比較して侵入時期が遅い。また、水田内でホタルイネ類が発生している場合には、本種の発生密度が高まり、斑点米被害は増加する。シズイネやヒエ類の発生も被害を助長することが報告されており、水田内雑草の発生は重要な被害要因となる。

本種は水田内でホタルイネ類が発生している場合には、本種の発生密度が高まり、斑点米被害は増加する。シズイネやヒエ類の発生も被害を助長することが報告されており、水田内雑草の発生は重要な被害要因となる。

成虫及び幼虫が主に葉裏に寄生し、吸汁加害をすることにより被害が生じる。多発すると生長が阻害され、枯れることがある。また排せつ物の汚れやススにより、商品性が低下する。アブラムシ類は繁殖力が高いことから、短期間のうちに密度が高くなる。そのため、低密度のうちの防除が重要である。施設栽培ではアブラムシ類の施設内への侵入を防止するため、開口部を防虫ネット(0.8mm目合程度)で被覆する。また、苗でのほ場への持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。露地栽培では、アブラムシ類の飛来を抑制する光反射マルチなどの活用も有効である。定植時の殺虫剤の処理は、生育初期のアブラムシ防除に高い効果が期待できる。

【防除対策】

①雑草管理 畦畔管理をこまめに実施し、発生源となるイネ科雑草を繁茂させないようにする。また、水田内の雑草対策を適切に実施する。

②薬剤防除 出穂期10日後頃を基本に、出穂期7日後〜15日後の間に茎葉散布剤(シノテフラン液剤、エチプロール水和剤、スルホキサフロール水和剤、有機リン剤)を散布する。特に散布が適期より早い場合は、残効が低下する登熟後半の被害が抑制できないおそれがあるため注意する。(農業試験場 阿曾和基)

本種は通常、出穂前の水田には侵入せず、水田畦畔や耕作放棄地等のイネ科植物等を寄主として増殖することから、これらの場所が主要な発生源となる。

本種は通常、出穂前の水田には侵入せず、水田畦畔や耕作放棄地等のイネ科植物等を寄主として増殖することから、これらの場所が主要な発生源となる。

殺虫剤分類 34

ファインセーブ フロアブル

アザミウマ類に高い効果! 高い耐雨性!

2週間の残効性に期待

農林水産省登録第24070号

日本化薬株式会社

ファインセーブは日本化薬の登録商標

記事の訂正

3月1日発行紙に掲載された「病害虫・雑草防除基準の解説(野菜・花き)」について

2 登録失効・変更または製造中止等に伴い令和8年版から削除された農薬として掲載された農薬のうち、以下の剤については、標記の対象ではなく、「別表殺虫剤の使用方法及び効果の整理により削除されましたが、引き続き、推奨農薬として防除方法欄には記載しています。訂正してお詫び申し上げます。

○オルトラン粒剤(キャベツ、ブロッコリー)
○ジェイエース粒剤(キャベツ、ブロッコリー)
○スタークル、アルバリン顆粒水溶剤(キャベツ)
○ガードナーフロアブル(キャベツ)
○ジュリポフロアブル(キャベツ)
○ベネビアOD(ブロッコリー)